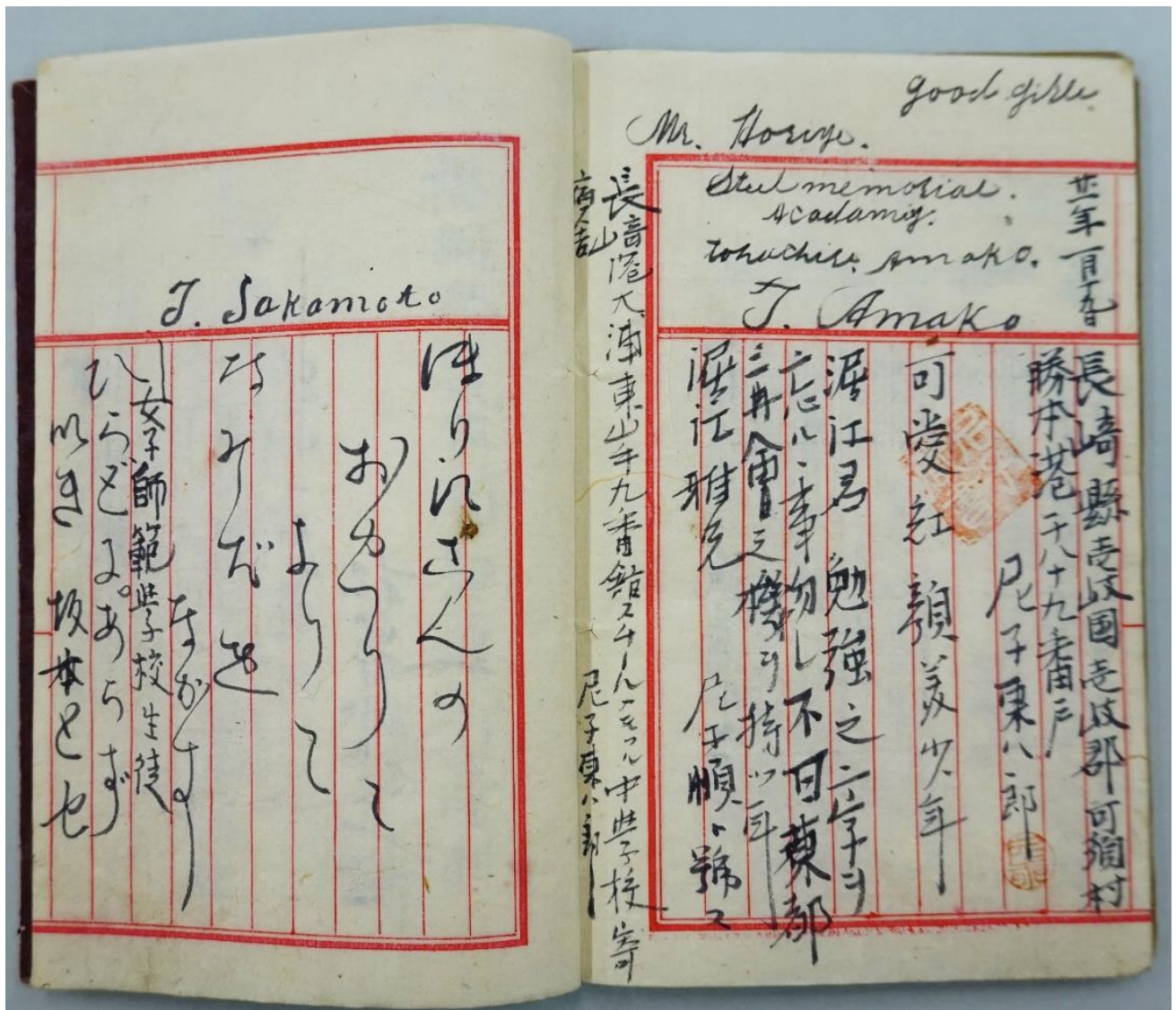


□水魚の交り



「惜別のサイン帳」より

右頁には壱岐の尼子東八郎氏からの寄せ書き、左頁には女子師範学校の坂本とせ氏からの寄せ書き

このサイン帳のなかで、印象的な言葉が「水魚の交わり」あるいは「竹雀の交わり」です。ある頁では豊次郎は堀江兄と書かれており、どれだけ豊次郎が学友や友人たちから慕われ、厚い親交をかわしていたのかをうかがい知ることができます。また学校の恩師と思われる人物からの激励の言葉も寄せられており、医師への夢を諦め帰郷することになった豊次郎を思う気持ちがあふれています。

寄せ書きの内容でもう一つ注目したいのが、おそらくこの寄せ書きを書かれた方々のなかで、ただひとり女性がいたということです。書いたのは壱岐出身の「坂本とせ」という女子師範学校の学生でした。この学校は居留地内ではなく西浜町という離れた場所にありましたので、同級生や近隣の学校の生徒が書いた他の寄せ書きとくらべるとやや異色な感じもします。サイン帳には“豊次郎の帰郷を聞いて涙を流している”と書かれているのですが、彼女がどういう気持ちでこれを書いたのか今は知るすべはありません。

ん。ただ豊次郎の1年余りの長崎遊学が、その後故郷に戻り苦勞することになる豊次郎の短い人生を彩る鮮やかな記憶になってくれたのではないか…そう願ってやみません。

#### □壱岐の尼子氏のこと

長崎県壱岐市の勝本漁港のすぐ近くにアマコ歯科医院があります。ここで医院長をされている尼子直樹氏の御祖父様である尼子東八郎氏が「惜別のサイン帳」に寄せ書きをされていたのです。豊次郎のご子孫の堀江千周氏がこのサイン帳に書かれている名前と住所を手掛かりに、尼子東八郎氏のご子孫である尼子直樹氏を探しあてたのでした。

尼子氏は江戸時代から壱岐で医者をつとめられていた家系で、その当主は代々「玄雄」と名乗り、地域医療に尽力されてきました。孫の直樹氏も御祖父様が長崎に渡り医学の勉強をしたことは伝え聞いていたそうです。しかしスチール・アカデミー（東山学院）に在学していたことは、堀江氏から連絡があるまで全くご存じがなく驚きを隠せなかったということです。東八郎氏は豊次郎のサイン帳に「可愛紅顔美少年 堀江君 勉強之ニ文字ヲ忘ルル事勿レ」と書きのこしており、そこには1年余りの間に培われた二人の交流と友情の証を見ることができます。



現在の勝本港

#### □さいごに

「惜別のサイン帳」に寄せ書きを書かれている方々のそれぞれの出身地を見ると、長崎県内はもちろん福岡・佐賀・熊本など九州を中心に日本各地から志をもって長崎へ学びに来られているのがわかります。中でも豊次郎は富山県出身ということで、もっとも遠方から長崎に学びにきた学生として一目置かれる存在だったかもしれません。江戸時代、外国文化の窓口だった長崎は明治時代になっても外国人居留地が残っており、新しい学問が学べる場所として人々に受け入れられていたのではないのでしょうか。またこのサイン帳によって、はじめて当時の居留地周辺の学生たちの交流のようすの一端が明らかになりました。そういう意味でもこの「惜別のサイン帳」は長崎にとって貴重な資料ということができます。

故郷に帰った豊次郎のその後ですが、家業の酒造業と父太平が起こした北前船事業を引き継ぎ、しばらくのあいだ経営は順調だったようです。しかし明治31年(1898)には町が大火に見舞われ辛うじて類焼は免れましたが、翌明治32年(1899)には神通川の氾濫により酒蔵が水没してしまいます。そのうえ北前船事業も鉄道網の普及



晩年の豊次郎（38歳）



と帆船から蒸気船への転換期がかさなり傾きははじめます。そしてついに明治33年（1900）多額の負債を抱えて廃業、その後豊次郎は借金の返済と家族を養うため保険の外交員となって身を粉にして働きました。明治42年（1909）年、長年の苦勞がたたったのか豊次郎は体調を崩し、翌年1月には会社を辞職します。その年の3月31日、妻と長男15歳、次男10歳を遺し豊次郎は他界しました（享年42歳）。不遇な人生を送った豊次郎のことは、妻も子供も多くを語ることはなかったそうです。

それから長い歳月が流れ、このサイン帳は豊次郎の孫（次男の子供）である堀江千周氏の元で大切に保管されていましたが、このたびご親族の総意を得て長崎歴史文化博物館に寄贈されることになりました。100年以上の時を経て豊次郎は短い青春時代をすごした長崎に帰って来ることができたのです。



加伯利英和学校のあった東山手居留地から出島方面をのぞむ（上野彦馬撮影 明治初期）

— 長崎遊学時代、豊次郎はこの景色を毎日眺めていたに違いない

長崎歴史文化博物館蔵

長崎県文化振興課 橋本 正信

資料提供：堀江千周 石尾和貴

参考文献：旅する長崎学 キリシタン文化Ⅴ「教会と学校が長崎の歴史を語る」（長崎文献社 2006）

華の長崎 秘蔵絵葉書コレクション （ブライアン・バークガフニ編著 長崎文献社 2005）